

## ウォーミングアップ その1

### 「なぜ研究するのか？」を確認する

「〇〇研修で何か研究をしなくちゃいけないらしい」「研究会でうちの地区に研究の順番が回ってきた！」・・・教員が改めて「研究」に向き合うのはこんな時が多いのではないか。

なぜ研究するのか、また何を研究すべきなのか、教員にとっての研究の意味を確認する。

## ■ なぜ教育に「研究」が必要とされるのか

教員は研究を行わなければならないことが、法律によって規定されている。

### 教育公務員特例法

(研修)

第 21 条 教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず**研究と修養**に努めなければならない。

このことについて、羽豆<sup>1)</sup> p9,10 は、次のように述べている。

この“絶えず”という言葉には、教師の研究・研修への自主的、自律的な意味を含んでいるものである。人を指導しながら自ら学ぶことを通して教師としての資質や能力を高めていくという性格を示しているものである。

・・・(中略)・・・教師にとっては、絶えざる研修が大切なのであり、教職経験を多く積むだけでは、良い教師になれるというものではない。教育という仕事そのものが、教師に絶えざる研究・研修を要求しているとも解釈できるものである。

また、島根県教育委員会「新任教員研修の手引」<sup>2)</sup>p17 には、次の記述がある。

すぐれた教師となるためには、常に研究と修養に努め、それを日々の教育実践に結びつけ、自己評価をする中で教育改善を進めなければならない。

研修は「教師の生命」である。自ら成長しつつある者のみが、他者を成長させることができるからである。

このように研究は、教員にとって必要不可欠のものであると位置づけられているが、教員であれば、意識しないまでも日常的に研究活動を行っている。

「この教材を用いれば子どもの理解が深まるのではないか」「この展開で授業したが、成果は芳しくなかった。なぜだろう？」など、その職務の性格上、有形無形に日々研究を行っているのである。

特定の課題や内容について、ある期間の区切りの中で、有形のものとして提示することが求められるのが、初任者研修や経験者研修、あるいは教科等の研究大会ということになる。

既に無形に行われている研究をあえて有形にするの意味は、ヴィゴツキー (Lev Semenovich Vygotsky, 1896-1934) の理論にもあるように、言語化することによって思考が深まる (言語化しない言葉は埋もれ隠れてしまう) という部分にある。時間に流されがちな日常の教育活動を、言語化し有形にすることが、教員個々の、あるいは学校の教育観の確立を促すものと考えられる。

## ■ 何を研究すれば良いのか

どの教員も、日々の研究の必要性は充分に感じている。しかし、いざ研究を行わなければならないという段になると、「何を研究すれば良いのか」「どう進めて行けばよいのか」という素朴な疑問に直面することも少なくない。

野田<sup>3)p16</sup>は、論文依頼を頼まれた人がそれを断る理由は何か、について次の3つをあげている。

- ① 時間がない      ② 実践がない      ③ 論文を書く力がない

これは、「研究に困難を感じる理由」としても読み替えられるであろう。日々研究的に行われている教育活動ではあるが、改めて研究として取り組み、一つの形にまとめるという作業は、なかなか困難を伴うものである。

さらに続いて野田は、これらの理由の裏に、「自分の実践に対する問題意識のなさ」があるのではないかとし、研究における問題意識の大切さを説く田中<sup>4)</sup>の次の言葉を引用している。

問題がなければ研究しなくていいのです。

言うまでもなくこの田中の言葉は逆説的なものであり、教員が職務としても研究を行わなければならない以上「研究しなくてよい」ということにはならないし、何よりも、教員であれば「実践がない」ということ、さらにその実践上に「問題がない」ということもありえない。一方で、「問題がなければ研究しなくて良い」ということは、「研究は何らかの問題を解決あるいは改善するために行われるものである」とも言える。

西川<sup>5)p13</sup>は次のように記述している。

一気に改善することはできなくとも、今までよりも一歩でも広い範囲の知見から研究しようとする努力は、教育改善研究の具体的な一歩である。

教員の行う研究は、時間に流されがちな日ごろの教育実践を振り返り、考察し、新たな視点や知見を得る作業を通して教育活動を改善しようとするものである。従って教員の行う研究は、やはり「**実践上直面する教育的な課題を研究する**」ものである必要がある。

しかし、教育的な課題をテーマとしていても、研究した内容が総花的な取り組みの羅列にすぎなければ、新たな知見を得られたとは言い難いものになる恐れもある。そのような研究では労多くして負担感と疲労感のみ残ってしまうことになる。

「研究のための研究」が取り組みのスタートであったとしても、研究を終えて「やって良かった」と思える内容にするためには、「何を研究すれば良いか」を、必然性（問題がなければ研究する必要はない）を持って、研究成果を具体的にイメージしながら（ねらいを明確にして）、設定することが重要である。